

◇ 紙碑 ◇

長倉美也子さんを偲んで

美也子様は、姉妹の様にしていらっしゃった、若々しくナイーブな感覚のお母様をおもちでした。教員時代、葉山のお宅にお招きいただいた折、「母は私が小さいときから、『母にできるだけのことをしてくれて、いつもここに不平一ついわなくて、戦後の苦しい時代たすかったのよ』と、ときどきいつてくれるの」とうれしそうに、母子の歴史を語って下さったことがありました。二階のお部屋のオルガンの前で、私は、お母様のお心づくしのお食事が、いっそう暖かいものに思えて、アパート住いのわひしさを洗い流していただきました。空気のような方でしたから、いつまでも私ごときものまでつつんでくださったでしょう。

お母様に早く逝かれ、お心の半分をなくされたような寂しさを、と思いおりましたところ、「これからは、母がはなしてくれていたような人生を考えたい」というお便りをいただきました。

ついに、求めていらした通りのご夫君にめぐり会われて、「私が年上なので、申し訳なくて」と、例によって、童女のように腕をかついで、幸せそうにいらしたのが、奈良に行かれる直前のクラス会のことでした。

私はむすこの幼稚園を探し歩いていた折、お人柄といい、物腰といい、かてて加えて風貌まで、美也子さんそっくりの先生にめぐり会いことができ、是非是非と、おたのみして親しくご指導いただきました。ときおり、むすこが「この頃のおかあさんたら、とてもきげんが悪いんだ」と、なやみをうちあげたようすで、私の雲行きがあやしくなると、ニコニコと懸命に笑顔をつくっては、私の顔を見上げてくる。「ははあん、ももよ先生のひとことがあったのだな」と、恥かしく思いながら、心の軌道修正を強いられたものでした。そんなくらしの中で、美也子さんと、百世先生がオーバーラップし、奈良から、たすけ舟を出していただいたような錯覚をおぼえたことがありました。

むかし、『野バラ』という映画がありました。主人公トミー少年の気高さ、いじらしさに、心打たれ涙があふれるのを、どうすることもできませんでした。美也子さんは、いのちと、あの少年のような魂を、おふたりの坊ちゃんに分け与えていらっしゃるのではないかしら、と余りに短かすぎた母と子のふれあいの時間を思わずにはいられません。

「あーら、おひさしぶり」などと、いつものぼたん桜にも似た、幸せそうな笑顔を母となられた誇りで、いっそう満たされて、ひょっこり現われるような気がしてなりません。

青井正江(10回生)

昭和51年5月8日没 36才